



学校だより

令和4年1月7日
横浜市立南本宿小学校
校長 西尾 琢郎
No. 5 5 1

みなほん 行く年来る年

校長 西尾琢郎

一昨年に続き、またしてもコロナにほんろうされ続けた一年が終わり、ようやく、新しい年がやってきました。皆さま、明けましておめでとうございます。この文を書いている12月下旬のいま、日本国内のコロナ感染は、まだ引き続き落ち着いた状態にあるものの、お隣の韓国をはじめ、欧米各国その他の国々では、変異種による感染が急速に拡大しつつある状態で、今後も予断を許さないものと思われます。本校としましては、この冬を、細心の注意をもって乗り切っていきたいと思っております。皆さまのご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

さて、この歳末、ある児童がご家庭の事情で、市外の小学校へと転校していきました。そのお別れの日、学級の子どもたちは、GIGA 端末を手に、力を合わせて、その児童が引っ越していく先の町や学校について熱心に調べ物をし、本人に伝えてくれたそうです。「楽しそうな町だね」「こんなものもあったよ」「こんな学校なら、安心して〇〇さんを任せられるね」など、中にはまるでその子の親御さんかのようなコメントを発する児童もいたようです(笑)。

私自身、小中あわせて3回の転校を経験しましたが、その都度、とても不安だったことを思い出しました。それをこの学級の子どもたちは、今手にしている新しいツールを活用して、転校するクラスメイトに、ただ別れを惜しむだけでなく、「新しい町や学校には、こんな楽しいことがあるよ」と、新しい学校での生活への希望を手渡してくれたのだと思います。その児童の最終登校日、最後の時間はクラス全員でのドッジボールでしたが、子どもたちの輝く笑顔が、とてもまぶしく見えました。

歳末のこの時期は、いよいよ6年生が巣立ちへの準備を本格化させる季節でもあります。私が毎年心待ちにしているのは、彼らが6年間の思いを込めてしたためる、卒業文集の原稿に目を通すことです。来春巣立っていく子どもたちは、小学校生活6年間の、すでにおよそ3分の1を、コロナ禍のもと過ごしてきました。その影響がないはずはありません。しかし今、その原稿に目を通しながら感じているのは、彼らの気持ちの成長ぶりです。子どもたちの多くが、将来の夢について筆を走らせているのですが、実にその多くが、「誰かを笑顔にする仕事に就きたい」と語るものでした。「自分のしたことで、誰かが笑顔になると自分もうれしい」と書いてくれた子どもも大勢います。私はそれを読んで、本当に胸が熱くなる思いがしました。この子たちは、きっとたくさんの思いを胸にしまい込みながらコロナ禍を乗り越えてきたに違いありません。だからこそ、身の回りに笑顔があってほしいと願い、またそのことによって自分も笑顔になれる、ということ、心底感じているのではないのでしょうか。

もう一つ印象的だったことは、インターネット上の動画などのコンテンツから、励ましや希望を得ていると書いた子どもたちの姿があったことです。またネットを通じて、社会をよくしたり、自らの夢を叶えたいという子どもたちもいました。ネット上にはさまざまな危険があることは、皆さんもご承知の通りです。しかし同じように、ネット上には希望や夢もあるのだと思います。子どもたちはネット上の悪意や危険を見極め、身を守る術をまだ十分には備えていません。ですから大人の見守りは欠かせませんが、怠らず見守る中で、子どもたちの気持ちを豊かにしてくれるような体験を広げてもらいたいと願っています。どうかお子さんと、日常的にたくさん話してください。その中で子どもたちがしていることに関心を示し、共感を寄せてもらいたいのです。その上で、本当にしてはならないこと、守るべきこと、を子どもたちとの間で「約束」していただきたいと思います。「約束」は、決して一方的に押しつけるものでなく、双方が心から納得し、守る価値があるという思いを共有したとき、はじめて本当の「約束」になります。親子の間に豊かな対話があり、それに根ざした「約束」が交わされていれば、きっと子どもたちは安心してネットの良さを存分に生かし、さまざまな学びを得ていくことができるでしょう。

明けたばかりの新しい一年が、子どもたちにとっても、保護者、地域の皆さまにとっても、素晴らしいものとなることを、心より祈念しております。本年も南本宿小学校と子どもたちを、どうぞよろしくお願い致します！